The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スウェーデン語からわかる英語表現の内面について：英語 farewell の語源を例に
Author(s)	清水, 育男
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2022, 24, p. 57-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87438
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スウェーデン語からわかる英語表現の内面について
― 英語 farewell の語源を例に ―

清水 育男

1. はじめに

スウェーデン語（以下，ス語と略す）がわかり始めると，今まで不思議に感じなかった言語現象に疑問を抱くことがしばしばある．それが，英語の文法事項であったり，日本語の文法や表現であったりする．こうした疑問を常日頃考えていると，アハ体験に結び付くことがよくある．本稿では，そのような事象の一つを取り上げて，その疑問に対処しながら，同時にス語の面白さや有用性を再認識しつつ，最終的に問題解決につなげようとする試みである．

2. 英語の farewell の語源は「よき旅をせよ」？

farewell という英語はヘミングウェイの小説 “A Farewell to Arms”(1929)でよく知られている．同小説のス語訳のタイトルは “Farväl till vapnen” で，英語の題名をそのまま直訳している．ス語の farväl も英語の farewell も今では，かなり堅い文体で荘重な雰囲気を醸し出す別れの挨拶表現になっているが，この語源を日本における大きな英和辞典の語源項目や語源辞典はどのように捉えているであろうか，英語圏で出版された辞典なども参照しながらみてゆきたい．

2.1.「旅をせよ」という語源

farewell の語源を『ジーニアス大』(2001)は〈14c；中英語 farewel. fare(旅をせよ)＋well(よき)〉と記載し，それを追認するかのように『ウィズダム』(2013)も〈fare（旅をしろ）well（うまく）〉として（「旅をしろ」という少々きつい日本語表現が適切なのかどうか疑問が残るところであるが），両辞典とも語源を「よき旅をせよ」と規定している．その他の日本におけるメジャーな英和辞典ではこの語源をどのように記述しているのかもみてみよう．

『新英和大』(2002)は〈≪c.1369≫ ← fare well (imper.): ↑〉の記述にとどまっている．そこで fare well の例文が挙げられている意味項目をみると，分類は 3 つあり，〈1.〈ある事が〉（...の具合に）運ぶ，2.（よく・まずく）やっていく，3．飲食する〉のどれに相当するのかわからない．また，それが別れの挨拶とどう結びつくのかの説明もない．そこで，同辞典の語源記述の協力者からなる寺澤(1997)で farewell を調べると，『新英和大』とほぼ同じ内容で〈ME. farewel ← fare well (imper.): ⇒↑，WELL[2]〉とあり，同書の凡例によれば，↑は see above とあるので「直前の動詞 fare を見よ」ということがわかる．そこでその項目を見ると，5 個

の意味が掲載されているが，そのトップに１．「旅をする」があるので，farewell の語源は「旅をする」を基調とするのか，それとも一体どの意味を選ぶべきなのか，迷ってしまう．一方 WELL[2] をみても，fare と結合した例はなく，そこには〈adv. よく〉とあるだけで，fare の意味の絞り込みができない．結局，断りがない限り，意味掲載順のトップにある「旅をする」がメインの意味と考え，語源は「旅をせよ」と理解してしまう．この語源辞典にはさらに，fare の意味記述の下に，〈原義は，*wayfarer, sea-faring,* FAREWELL などの複合語に残っている〉とあり，『新英和大』で wayfarer, seafaring を見ると〈旅人〉，〈海上旅行の〉とあるので，読者は farewell の語源は，必然的に「よき旅をせよ」と確信し，結果的には『ジーニアス大』と同じ結論で納得してしまう．

『ランダムハウス』(1994)は〈c1384. 中期英語 farewel. → FARE, WELL[1]〉とし，『新英和大』とまったく同様，well からもまた動詞 fare の複数ある意味からも farewell の fare がどの意味に相当するのか確定できない．一方『ルミナス』(2005)の語源の記述も『新英和大』に準ずるが，唯一≪☞ welfare 語源≫という情報があり，別の視点を示唆しているが，farewell と welfare がどう結びつくのかは全く説明されていない．寺澤(1997)の farewell では welfare に言及はないが，welfare の項目をみると〈ME. wel fare (WELL[2] (adv.), fare (v).(なぞり)？) ← ON *velferð*: cf. FAREWELL... 〉とあり，farewell の語源に関しては結局堂々巡りで，これ以上探索のしようがない．しかし，←は凡例によると「借用」とあり，「(なぞり)？」は calque とあるので，「翻訳借用語？」を主張しているらしく，その借用元が ON(=Old Norse)の velferð と解釈できる．しかし，翻訳借用とする根拠が示されていないのでコメントのしようがなく，これだけでは farewell の語源解明の直接的な情報は得られない．通例同じ２要素からなる語とその要素の位置を逆転させただけの語との間には何らかの意味の関連性が予想されるが，welfare は〈happiness, well-being〉などであって「旅」らしき意味はまったく見出せない．

借用元とされる古アイスランド語の velferð の意味や概念〈well-doing〉(Cleasby & Vigfusson: 1957)をそのまま借用したければ，farewell「旅をせよ」の意味と混同をきたす恐れのある welfare などは初めから度外視して，velferð をそのまま借入すべきであったのではないだろうか．そうでなくても velferð 自体を中英語風に *welferdh/*welferth と変えて借用したとしても中英語の音韻体系に抵触することはなかったはずである．それを，なぜ後要素の -ferð をそのまま使わずに，あたかも farewell の前要素と後要素をひっくり返したような造語にする必要があったのであろうか（その特殊性については 6 章を参照）．welfare の初出が 1300 年代であることから古アイスランド語とは何らかの接触があったとしても，問題はその経緯を裏付ける証拠がない．いずれにせよ，welfare にも velferð にも「よき旅」

などの意味は見出せないことは明白である．

welfare に「よき旅」の意味がなければ，farewell の「よき旅を」とする語源も揺らいでくる．逆を言えば，welfare に〈well-doing〉的な意味があれば，farewell の語源に〈well-doing〉に関係する意味が潜んでいる可能性が生じてくる．

次に，英語圏の辞書，特に膨大な情報を含む OED(1989)をまずみておく必要があろう．farewell の項目を見ると，語源について直接的な言及はなく，意味 1 として

1. An expression of good wishes at the parting of friends, originally addressed to the one setting forth, but in later use a mere formula of civility at parting; Good-bye! Adieu! Now *poet. or rhetorical*, and chiefly implying regretful feeling. その初出は 1377 年とある．

この後にも二次的な意味の記述が続くが，まず 1 の意味で十分なので残りは省略する．この OED の記述に「別れ」は含まれているにせよ，キーワードとも言える「旅」やその周辺的な意味はまったく出てこない．ここはまさに farewell 自体の項目であるから，本来の意味や史的説明がしっかりと記述されてしかるべきであるのに，それが見出せないことは，「旅」などという語源はそもそも存在しないのではないかという疑問が湧いてくる．OED にはさらに動詞 fare の意味 9 に以下のような説明がある．

9. Used in imperative with *well*, as an expression of good wishes to a parting friend, or as a mere formula in recognition of parting; = FAREWELL. int. arch. with a person as *subj.* (see sense 7). 初出 1377 年. [int.=間投詞]

ここでいう sense（＝意味）7 とは

To ‘get on’ (well or ill); to experience good or bad fortune or treatment. 初出は 1000 年.

すると語源［farewell＝よき旅をせよ］という構図はかなり危ういものに思えてくる．上の記述から動詞句 fare well の初出(意味 7)は，別れの挨拶 farewell よりも 380 年近く前から存在していたことがわかる．farewell を調べるには，むしろその元となった動詞句 fare well の意味・用法から考察していかなくてはならないだろう．

ここで言う fare well という表現が現代の英語にもあるのかどうかを先にチェックしておこう．この表現は大辞典にあたらずとも，たとえば『ルミナス』の fare にも記述があり，以下のような例文を載せながら，〈≪格式≫（人が）やっていく．語法 well, badly などの様態の副詞を伴うことが多い〉と説明されている．

She fared well [badly] in the interview.
〈彼女は面接をうまくこなした［しくじった］〉
How did you fare in the speech contest?
〈スピーチコンテストはどうでした？〉

farewell の語源は fare のこの意味の中に潜んでいる疑いが強くなる．そのような中で，政村(2002)の fare の項目に〈解 good-by の意味で farewell を用いることがあるが，この場合は〈ものごとがうまく進みますように（=May you fare well）〉の意が込められている〉［下線は筆者］という記述があり，その下に fare がそのように用いられている例文が 3 例挙げられている．farewell に「うまく進みますように」という意味を明確に言及した辞書として評価されるが，この説明は下記に紹介する Onion(1966)や Skeat(1911)に基づいているものと思われる．さらに，政村(2002)の記述には下線を付した説明に，腑に落ちない点がある．これでは，farewell が good-bye の意味で用いられなければ，別の意味がありうることを示唆してしまう．それがどのような意味を想定しているのかが明記されていない限り，ひょっとしたら，これまでの語源に掲げられてきた「よき旅をせよ」の意味である場合には，「ものごとがうまく進みますように」の意味はないという解釈が発生してしまう点である．farewell は荘重ではあるが，別れの意味以外はないはずで，この記述は誤解を招く．ちなみに，good-bye の初出は 1573-80 年で『新英和大』も『ランダムハウス』も一致している．good-bye 出現以前の farewell は一体どういう意味だったのだろうか．

一方，小島(2004)の辞典では farewell の語源を〈命令形の fare well(うまくやっていけ)から. good-bye よりも古い言い方〉としている. 政村(2002)の主張する語源に近いが，由来が命令形とは言え「うまくやっていけ」というやや乱暴な言い回しにする必要性がわからない．そもそも farewell 自体が古風な表現であることを考慮すれば，その由来にこのような砕けた言い回しを充てる場合はその理由を示す必要があろう．

さて次に Onions(1966)を見ると farewell の意味は〈*proceed happily;* see well[2], *orig. imper.*〉とし，OED の説明に近く，Skeat（1911)も〈*may you speed well*〉を挙げつつも，welfare については〈*successful practice or journey*〉とし，なぜこにいきなり journey を持ち出すのか不明で, 依然として「旅」にこだわっているように思える．

Partridge(1966)は，farewell の語源を単純明快に〈*Have a good journey!*〉と言い切っている.『ジーニアス大』などの「旅」語源を主張する説はひょっとしたら Partridge の説に影響されているのかもしれない．farewell の語源は，OED が主張し Onions や Skeat が仄めかす〈*proceed happily*〉,〈*may you speed well*〉的な意味なのか，それとも「旅」を起源とするのかに絞られてくる．

なお，中英語の辞書 MED(1891)には farewell の項目はなく，wel-fare の説明として〈welfare〉とあるのみで，動詞 fare に例文はあるが意味の定義がない．一方，名詞としての fare に〈*journey ; conveyance; equipment; behaviour; success, fortune*〉とあり，ここも journey をトップに挙げているのは編者の主張の表れであろう．なお，並記されている behaviour, success, fortune との関係については触れられていない．

2.2. 日本における farewell の語源説は何を示唆しているのか？

日本における farewell の語源の主張は大きく分けて三つ，一つは単純明快に「よき旅を」を由来とする説と，もう一つは「fare+well 参照」とし，その後の解釈を読者に委ねてしまう方法である．前者は間違っていたとしても，出発点を明示している点で，そこから異論・反論を発展させることができるので，それなりの意義はあるが，後者は結論を示さず曖昧なままということは，はっきりとした主張が見えず評価不能に陥ってしまう．三つめは「うまく進むように」「うまくやれ」などであるが，何がうまくいく/何をうまくやるのかが明確に示されていない．

いずれにせよ，第三者の視点からみると英語と同じ意味を有する動詞句[fara+väl/illa]がス語にも存在していることから，いきなり「旅」とする語源説には疑問を持たざるをえず，同時に英語サイドにおいて[fare+well/ill]の用法にほとんど注意が払われていないことに大きな違和感をもつ．ス語にもあるこの動詞句が英語の farewell の語源解明に貢献するのではないかと考えた所以である．

3. 他のゲルマン語で farewell はどう表現されているのか？

farewell に一字一句語源的に相当する別れの挨拶表現は英語に限らず，他のゲルマン語全般にわたってもみられ，現代語においては荘重で古風な感じがするにせよ，別れの挨拶として現役で使われている．

> 古・現代アイスランド語 far vel，ス語 farväl，デンマーク語 farvel，ノルウェー語 farvel，ドイツ語 Fahr wohl，オランダ語 vaarwel．［ゴート語は動詞 faran，副詞 waíla は存在しているが，結合して出てくる例はないので，挨拶言葉として使われていたかどうかは不明］

ゴート語は別にして，多少の形の違いはあるにしても，共通して［動詞命令形＋副詞］であり，各単語の語源もゲルマン諸語で一致していることは即理解できる．この挨拶言葉の基となっている動詞句が英語，ノルド諸語はもちろんドイツ語(gut/schlecht fahren〈うまく（へまを）やる，（選択して）当てる（損をする）〉．国松(2000: fahren)）にも認められることから，この動詞句による別れの挨拶表現は相互間の借用関係であるはずはなく，古くから共通に存在していたと想定しても問題はないだろう．これだけ古くしかも，現在も変わらずほぼ同じ意味で使われているゲルマン語共通の動詞句である挨拶言葉を，同語派のス語から英語の farewell の語源を論じても十分有益な情報を提供できるであろう．

動詞 fare も副詞 well も語源は比較的透明で，それぞれの語が有する意味もゲルマン諸語で一致しており，動詞 fare/fara/fahren などの根本的な意味も「移動」という点で同一であるが，これが副詞 well 相当句と結合してどのような経過を辿って別れの言葉に変容していったのかを第一に解明しなくてはならない．ほぼ全ゲルマン語で[fare+well/ill]相当句が一律に別れの表現に発展していったからには，

fare と well/ill の結合によって生じた意味から検討していかなくてはならない．それをス語の farväl を基軸に[fara+väl/illa]からみていきたい．

3.1. スウェーデン語の farväl はどのような意味か？

ス語の別れの挨拶 farväl が動詞句[fara+väl/illa]とどのような経路を経て繋がっているのかを，英語サイドからみても参考になるのではないかと思い，これらを通時的にみていきたい．まずは，farväl の意味を確認しながら，次に動詞 fara の第一の意味を検討したうえで，[fara+väl/illa]の意味をみてゆく．

3.2. 前期・古スウェーデン語における farväl

前期・古ス語（= äldre fornsvenska: 1225 年頃～1375 年頃．ス語の時代区分については，清水(1998：90-91)参照）に書かれたスウェーデンの地方法の語彙を収録した Schlyter(1877)の辞書からからみていく．しかし, farväl の項目は見当たらない．そこでまずは，動詞 fara の基本的意味 1)と[fara+väl/illa]の句が含まれる 5)の意味をみてみよう．

fara 1) fara, gå, löpa, begifva sig. 〈**fara** 1）行く，歩く，走る，出立する〉

fara 5) befinna sig (i ett visst tillstånd), undergå en viss behandling *Sveriki for væl, sea horo barna pænninga fara,* VG.［中略］... *kan alt væl fara.*, går allt väl VM11 Æ. 2:1

〈**fara** 5）（ある種の状態に）なっている，ある種の扱いを受ける．「スウェーデンはいい状態にあった, 子供たちのお金がどうなっているのかを見る」VG.［中略］...「すべてうまくいくことができる」VM11 Æ. 2:1.［筆者注：VG = *Västgötalagen.* ヴェストユータランド法；VM = *Västmannalagen.* ヴェストマンランド法，Æ=Ærfda balkær. 相続条項］〉

Sveriki は主格であることから，fara の主語であることがわかる．次の文の alt も主格である．中性形なので, 対格も考えられるが, この文の語順から対格はありえない．ちなみに，複数形 pænninga は主格の-r 語尾が脱落したものと考えられる．fara の主語は無人称ではなくモノ・コトであるため，farväl の far の命令形は単数 2 人称に向けられたものと解釈して問題はない．ちなみに，英語の farewell の fare も各辞書で指摘されているように，2 人称の命令形である．なお, illa, væl の項目には fara の例文はない．

3.3. 後期・古スウェーデン語における farväl

次に後期・古ス語（=yngre fornsvenska：1375 年頃～1526 年）の文献から収録した Söderwall(1884-1918)の辞書をみると，

fara 1) fara, färdas, gå, begifva sig. 〈 **fara** 1）行く，（長距離を何らかの交通手段でもって）移動する，進む，出立する〉

fara 6) få ett visst öde, komma el. vara i ett tillstånd, befinna sig, fara.[中略]...*räddis hon at sculde illa fara* (att det skulle gå henne illa). Bil 867. [中略]...*han skal illa fara vnder swärdh oc hunger oc old*. MB. 1.10. ...[中略] *foro hans saar illa*. Di 192. ... [中略] *henna klädhe waro... ila farin*. ST292. *lät them wäl fara* (gå med fred) ib 471 — ss afskedshelsning. *far hel ok säl,* var lycklig, far väl. *far nu hel ok säl* Bu 521. Di 77.

〈**fara** 6)（避けることができずに降りかかってくる）ある種の運を受け入れる，ある状態になる/ある状態である．ある状況になっている，行く．[中略]...「自分はひどい目に遭うことになりそうだと彼女は恐れていた」Bil.（=*Codex Bild-stenianus*）867. [中略]...「剣と飢餓と寄る年波で彼は苦境に陥ることになる」MB.（=*Svenska medeltidens Bibel-Arbeten*）1.10. [中略]...「彼の傷はひどい状態になった」Di（=*Sagan om Didrik af Bern*）192. [中略]...「彼女の服はボロボロだった」ST（=*Själens Tröst*）292.「彼らを平穏に行かせてあげた」ib 471. — 別れの挨拶として．「お幸せに，ご無事で（=far väl）」,「それではどうぞお元気で」Bu（=*Codex Bureanus*）521. Di 77〉

fara の例文すべてにおいて主語は具体的な人もしくはモノであって，det（=*it*）を用いる非人称が主語ではないことを確認しておく．

— far väl (i detta uttryck ingår äfven betydelsen 1), må det gå dig väl, var lycklig, far väl. ss yttrande till en afresande, *far nu väl* Fl 560. *far wel son* RK1:1918.

〈— far väl（この表現には意味１）も含まれる）願わくはあなたにとって順調にいくことを，お幸せに，どうぞご無事で．出立する人への言葉として．「それではつつがなく」Fl（=*Flores och Blanzeflor*）560．「息子よ，気を付けてな」RK（=*Svenska Medeltidens Rim-Krönikor*）1:1918.〉

上記の説明の far väl の項で言う意味１）とは fara 1）の「行く，（何らかの交通手段を使って）移動する，進む，出立する」のことである．fara 1）の意味が出立のような状況において，fara 6）の意味になるとすれば，目的地に向かう空間的な意味ばかりでなく，時間的に捉えてその後の人生においても何かの突発的な，制御しがたい事件，事故，災難，病などのトラブルなどに巻き込まれないことを祈る，いわば安全安寧を願う趣旨もあったろうということは容易に想像できる（この意味拡張については４章参照）．

さらに，fara 6）の意味定義の冒頭に få ett visst öde で説明されていることに注目すべきである．öde は英語の fate に近く，動詞 få は〈もらう，くらう〉（事が主語の意志外で進むことを示す動詞．清水（2000）参照）が使われていることから，farväl を解釈するには「御しがたい運」という意味を視野に入れておく必要がある．

すると farväl の願いは旅行期間中に限定され，旅が終わればその効力は終了などという単純な祈りではない．ましてや，永の別れとなれば，その祈りは目的地に

到着した後でさえも引き続き有効で基本的に永続すると考えるほうが自然である．この潜在的な「御しがたい運」を顕在化して表出すれば，「これから先もずっと，良き（väl）「運」（öde）があなたに寄り添い，順調にことが進まれんことを」という，「幸運を願う」希求法的な別れの表現になるであろう．いかにも重厚な感じを醸し出すことに疑いはなく，現在も荘重な文体で使用されるということは，この延長線上にあるからだと思われる．

翻ってみると，日本語で神仏に祈願する際の「家内安全，無病息災，厄除開運」などに近いと言えるかもしれない．ちなみに，farväl にあるような祈願の趣旨は，現代ス語（デンマーク語，ノルウェー語にもある）で日常的に使われる別の，別れの挨拶 ”Ha det så bra!”[1] 〈ご機嫌よろしゅう！〉，〈元気でね！〉に通じるものがある．この挨拶の根底にある意図を突き詰めれば，「今ある状況が崩れないように，現状が至極良いままで（det = så bra）あることを！」の願いに尽きる．別れた後でもその人に何か災難などが起きないようにと案じつつ，良き状態の継続を別れ際に願う，いわばfarväl が目論む祈願に通底しているところがある．文体こそ口語的ではあるが，farväl 的な思考方法が底流になければ，この別れの表現は出現しなかったものと思われる．その意味でこうした表現を有するノルド諸語は特異な存在と言えるかもしれない．

さて，Söderwall(1884-1918)の farväl に戻ることにしよう．

— ss yttrande af en döende. *farin nu wäl mine käraste... ffaar wäl iordh, ffaar wäl wärld, ffaren wäl alla wärldzlika wener* Su 131.

〈臨終を迎えた人の言葉として．「わが最愛の友たちよ，皆さんに幸運を．... 大地よ，この世よ，この世のすべての友よ，運に恵まれますように」Su（=*H. Susos Gudeliga Snilles Väckare*）131.〉［筆者注：*farin* は fara の複数 2 人称の命令形］

これは臨終の人が，残された者たちへの安寧をひたすら願う最後の言葉であって，上述のように災難などを回避する願いが原点になければ，この発言にはならない．残された人たちに掛ける言葉が「よき旅を！」では歯車が全くかみ合わない．

さらに，väl の項目には以下のような記述がある．

väl 1）efter önskan, till hugnad, till glädje.［中略］... *adrianus ...baþ hana väl fara hem tel sit hus.* Bu 519. *hirdhin badh mik väl fara.* Iv 378.

〈**väl** 1）願いにそって，満足な状態へ，喜びに．［中略］...「アドリアーヌスは彼女が自分の家へつつがなく帰ることを願った．」Bu 519.「その羊飼いは私の無事を願ってくれた．」Iv（=*Herr Ivan Lejon-Riddaren*）378.〉［筆者注：*hana väl fara hem* と *mik väl fara* の fara の意味上の主語は *hana* 〈彼女〉，*mik* 〈私〉］

なお，farväl 自体の項目はない．項目 illa にも fara との例文はない．そこに掲載

[1] デンマーク語は Hav det godt!，ノルウェー語は Ha det bra!．det は漠然とした周囲の状況を示し，その状態が良きままにあること（det = godt/bra）を指す，Hav/Ha は far と同様に 2 人称の命令形．

されている例 fara illa wil は〈ベールが似合わない〉という二次的な意味である．

ところで，farväl という別れの挨拶としてのス語での初出は，SAOB によると 1665 年とされているが(3.4.参照)，上に挙げた文献の文脈やまたその両文献の出典がともに 1300 年代という点からみても，さらには Hellquist(1948(1966): fara)では〈別れの挨拶 farväl(すでに古スウェーデン語期からある)〉と説明していることからも，前期か後期かは特定できないにせよ，すでに古スウェーデン語には別れの挨拶としてほぼ確立していたことは間違いないであろう．

3.4. 新スウェーデン語における farväl

次に新ス語（nysvenska: 1526 年～現在）を扱った SAOB(1898ff.)をみてみよう．項目 farväl は間投詞，名詞の順に記載されているが，両者の意味はほぼ同じで重なるので，名詞の意味は省略する(初出は 1665 年とあるが，実際には古ス語から存在していたとみてよいであろう．3.3.参照)．

> **farväl** I . avskedstillrop, eg. o. urspr. innebärande en välgångsönskan: adjö; äv. (i sht i högre stil) riktat till ngt sakligt, t. ex. lifvet l. världen o. dess fröjder, en plats l. nejd (som man med saknad lämnar) osv.; vard. ofta åtföljt av prep. *med.*
> 〈**farväl** I . 別れの挨拶の間投詞，語源的には本来幸運を願うことを意味する：adjö 〈さらば〉；（とりわけ比較的高い文体で）何か具体的な事柄，たとえば，人生・命もしくは世間やそれに付随する喜び，（未練を残しつつ去る）場所やその周辺などに対して．口語ではしばしば前置詞 med を伴う〉

ここで言う välgångsönskan〈幸運への願い〉は OED の〈good wishes〉に意味的に一致している．OED と同様に，この記載から farväl の元来の意味は，3.3.でも言及したが，「幸運を願うこと」にあることに注目したい．

ところで SAOB の動詞 fara 1)の意味は，先にみてきた 2 つのス語辞典の「移動」の意味範囲を逸脱するものではないので省略し，別れの挨拶の farväl の基となった fara väl の結合をみていこう．辞書の掲載順では fara illa が先に載っているが，目下 fara väl が問題になっているので，その項目 6)c)から先にみていく．

> **6)** för att uttrycka hur det går för ngn l. ngt, hur ngn befinner sig o. d.
> 〈6)その人あるいはその事がどのような具合に進展するのか，どのような状態になっているのかなどを表す〉
> *c)* (numera bl. i högre stil) i förb. *fara väl,* i (muntlig l. skriftlig) avskedsformel; förr ofta i uttr. *bjuda* l. *bedja* (ngn) *fara väl,* <u>med önskan om välgång</u> taga avsked (av ngn), skiljas från (ngn l. ngt), stundom: avstå från (ngt); jfr FARVÄL. ［中略］...*NT* 1526)．［下線は筆者による］

〈*c) fara väl* の結合（今日では比較的高い文体に限られる），（話し言葉や書き言葉の）別れの挨拶．かつてはよく次のような表現で：*bjuda* l. *bedja* (ngn) *fara väl*「幸運の願いを込めて(誰々)に fara väl を伝える・祈る，(誰々・何々)と別れる，時には(何か）を控える．FARVÄL と比較．［中略］...新約聖書 1526 年〉

ここも bjuda〈申し出る〉や bedja〈祈る〉という動詞を伴って「幸運の願いを込めて」とあり，3.3.の指摘に合致している．さて，fara väl があれば英語の fare ill 表現と並行して，ス語には fara illa もあり，上記の fara väl の直前に，それが次のように記載されている．

a) i uttr. *ngn far illa* o. d., det går illa l. olyckligt för ngn, ngn råkar illa ut, kommer i olycka l. till skada o. d.; numera nästan bl. i uttr. *den illa gör han illa far;* förr äv. (jfr *c) ngn far väl,* det går väl l. lyckligt för ngn.（1530).

〈*a) ngn far illa* などの表現において，誰か・何かにとって事がうまくいかない，不運となる，ひどい目にあう，事故に巻き込まれる，被害を受けるなど；今ではほぼ「悪いことをする者は罰（バチ）があたる」という表現に特化して．以前は *ngn far väl*（c を参照）もあり「誰々にとって事態がうまく行く，運よく進む」〉（初出 1530 年）

さらに，fara illa に特化した説明が illa の項にもあるので，引き続きこの意味定義を載せる．ただし，上記の記述とほぼ同じである部分の訳は中略し，補足されている箇所のみを示す．

illa *c)* i uttr. *fara illa, ...*［中略］dels (vard.) med särskild tanke på yttre levnadsförhållanden: ha det dåligt (ställt), slita ondt, lida brist, frysa l. svälta o. d.

〈*c)* 表現 *fara illa* は ...［中略］部分的には（話し言葉で）外面的な生活状況を特に念頭に置いて「経済的に困っている，困窮している，不足に悩まされている，凍えている，飢えているなど」〉

再び，fara 6)の項目に戻ると，fara väl /illa を一緒にして扱った説明が 6 ）a)の直後にあるので，それも示す．

b) i förb. *fara väl* l. *illa,* ha det bra l. godt, må väl o. d., resp. ha det illa l. besvärligt, slita ondt, lida men o. d. *Vppå thet at fodringen må tess bettre nå til och hesterna fara wel. GR* 7: 183 (1530). ....［中略］*Kläderna fara illa af damb.* WIDEGREN (1788).

〈b) *fara väl / illa* という結合で「調子がいい，体調がいい/調子が悪い，困難な目に遭う，苦労する，苦しむ」など．「飼料がより一層向上すると，馬の状態がよくなることで」*GR* 7: 183 (1530 年初出)...［中略］「服が埃で傷む」WIDEGREN (1788)〉（筆者注：*GR*＝*Konung Gustaf den förstes registratur*）

これらの定義のどこをみても，「よき旅を」の意味は見当たらない．去ってゆく人に発せられる farväl は，状況次第では「無事な旅を」も含まれる可能性はあるに

しても，「よき旅を」から「その人の運を祈る」に発展するような経過を辿れる例は少なくともス語では見出すことができない．むしろ初めから，出発点は捉えがたい運に恵まれたい切実な願いがこもった表現と解釈したほうが，はるかにわかりやすい．

4. farväl は元来どんな意味であったのだろうか？

前章で fara や fara väl/illa の意味を通時的に辿ってきたが，これらの記述を総合すると，fara väl と fara illa はほぼ正反対の意味関係にあることがわかる．fara は元来 ”移動” の意味であるが，それに väl/illa を伴うと「移動中に何か良いこと/悪いことに突き当たる，何か良いめぐり合わせに出くわす・運がいい/悪いことに陥る・付いてない」ということになれば，具体的な空間移動から時間の経過（移動）を経由して思考面において「...に遭遇する，出くわす，運・不運に巡りあう，行く末が...になる，身の上に...が生じる，...という境遇となる・になる」のような意味が生じても不思議はない．

こうした意味拡張が発生した要因も考えておく必要があろう．英語の farewell，ス語 farväl に限らずノルド語全般にわたって，この句が発音される際，現在でも後要素の well/väl/vel に強勢が置かれることを見逃してはならない．ゲルマン語成立当初からの一般的な特徴として，強勢は語の第 1 音節に置かれるのが通例であるが，この名詞もしくは間投詞はその原則に従っていない．そもそもこの挨拶表現の原形は動詞の命令形と副詞から構成されているが，強勢は動詞に置かれずに，直後の副詞に置かれている．これは英語でいう句動詞，ス語では小辞動詞(partikelverb)と呼ばれる構成[動詞＋小辞]そのものの命令形である．その場合，強勢は動詞ではなく小辞に置かれ，それにより動詞の意味を時には微妙に，時には大幅に変える現象を引き起こす. 小辞動詞はゲルマン諸語全般に古くからみられ，この挨拶表現は強勢の位置も含め，この小辞動詞の命令形をそのまま引き継いでいる. この構成法から考えれば, well/ill や väl/illa に強勢を置き, 小辞として機能させ，それと組み合わせた動詞 fare や fara の元来の意味を変容させて，上記のような意味「運/不運に巡りあう」に拡張させ, 延いては, この句の命令形が別れの挨拶，すなわち間投詞となり，さらには名詞に固定化していったものと考えられる．ちなみに，ともに同じ小辞で強勢を有し，しかも本来の動詞の意味を微妙に逸脱させた同様の例として英語の speak **ill/well** of，ス語の tala **illa /väl** om を挙げておく（英語・ス語ともにそれぞれ〈～をけなす/～をほめる〉．太字は強勢を示す）．

ところで，日本語の諺に「犬も歩けば棒に当たる」があるが，その解釈は『新明解』（2011）によれば，〈①何かしようとすると（出しゃばると）よく災いに会うものだ．②何かをすれば，時には思わぬ幸運に出会うものだ〉とあり，ス語の語感で言えば「歩く」は移動の fara を，「棒に当たる」の「棒」とは「御しがたい運命」で，

その運命の「運/不運」が väl/illa に相当し，「当たる」は「出くわす」という意味での動詞句[fara+väl/illa]の中で使われる fara に近いものがある．また日本語の「行く末」も fara の「移動」と「その結末」の両方の意味を含み，「末」によって「移動後に遭遇する事態」が示唆されており，ここで使われる fara の意味の理解の一助となろう．

これまでも，「運」的なものを示唆してきたが，[fara+väl/illa]も[fare+well/ill]も主語本人の努力で väl/well を手繰り寄せることはできないし，また本人の意志で illa/ill になるわけでもない．ましてや farväl や farewell の中の動詞 fara/fare が命令形だからといって相手にそう命じても，当人の努力でどうなるものでもない．するとこの命令形は「そうなって欲しい」という願望であり，先に挙げた Skeat(1911)の “May you speed well!” の may にみられる “祈願”，ス語の må（må han leva! ‹長生きされることを！›）の “祈願” の用法に相当しよう．すると一体誰・何に願掛けをするのであろうか．キリスト教普及以前（以後であっても）であれば，「運」以外に考えられない．

そこで，まずは最悪の不運に「遭遇する」表現から考えてみよう．ス語には「死に遭遇する，死を受け入れる，命を落とす」という古くから使われている表現 ljuta döden があるが，ここからから考えてみたい．ljuta と同語源の動詞はゴート語を除くすべてのゲルマン語に存在しており，古・現代アイスランド語では hljóta “to have allotted to oneself”，ドイツ語では losen ‹くじ(引き)で決める›，英語では lot ‹くじを引く，割り当てる›があり（ちなみに，この名詞形 lot が「たくさん」の意味を帯び始めたのはずっと後の 1812 年（寺澤：1997 lot の項）），その派生語 lottery や lotto などには今でも「運」の意味が十分感じられる．さらにまた現代ス語には今も lyckligt lottad ‹幸運に恵まれた›などという表現もよく使用される．

英語の lot の意味などが示しているように，先々の結末を「くじ(ラテン語 sors)」で占う習慣がゲルマン人の間にあったという記録がタキトゥスの『ゲルマーニア』(1979：10 章)に残されており，紀元 1 世紀頃のゲルマンの世界では，将来起きうる結果をくじ占いに委ねる考え方があったことが伺われる．ちなみに，ラテン語の sors も英語に入り，現在の sort ‹種類›になっているが，もとをただせば「くじ(引き)，運命」の意味であって，現在では sort も lot もともに「人の運命」が絡む意味から大きく影を潜めて平凡な日常語になっているのは，「くじ，運」などに全面的に頼る風潮が薄らいできた時代の流れを反映しているのかもしれない．

さて，「得体のしれない，御しがたい何かの仕業」に起因する「運/不運」の存在がゲルマン民族の間で信じられたとしても何ら不思議はない．そして結末を予めくじ占いで知ろうとすることも理解しやすい．良いくじに当たれば ”運が良い”

「吉」，すなわち(幸)運とし，悪いくじに当たれば ”運が悪い”「凶」，すなわち不運とし，そのまま受容されたことであろう．

ゲルマーニアの時代からくじを底流にした[(幸)運：不運]の概念に，ゲルマン民族が[väl：illa]（各ゲルマン諸語でのそれぞれの同語源もしくは同意語相当語）を充て，そこに「移動・行く末」的な意味を有する fara（ならびにその各ゲルマン諸語の同語源相当の動詞）と組み合わせて，動詞句[fara+väl/illa]が成立したものと考えれば，ゲルマン語全体に同一の構造の表現句が見られても何ら不思議はない．

そこで，この[(幸)運：不運]が古北欧の世界では，どう捉えられていたのかを考えてみよう．北欧の世界では，ハストロプ編（1996：第 12 章「運に左右される経済」）によると，運・不運が人生や世界に影響を及ぼす要素であったこと，そして運・不運の前兆や出現に関わるのが古アイスランド語の hugr「守護霊」の威力によるものであったとされている．hugr の意味は〈mind〉をはじめ多くの意味があるが，その中の１つに〈foreboding〉「予感」があり，次のような例文が挙げられている．

> *Svá segir mér hugr um.* ”so says my mind to me”, ”I forebode”. Forn-sögur. 127(Cleasby & Vigfusson: 1957).

これから見て取れるように[(幸)運：不運]の予知を垂れるのは，hugr であった可能性を指摘しておきたい．ちなみに hugr と同語源に，ス語 håg〈mind〉, komma ihåg〈to remember〉，デ語 hu〈mind〉, huske(< *hugske, cf. ON. hugsa）〈to remember〉, hygge〈coziness〉，そして英語 hug (ON. hugga〈to comfort〉からの借入語)などがあり，ここから hugr の本来の意味「心の奥に潜む働き」的な一面が垣間見えよう．

ちなみに，ス語で日常よく使われる表現 ”hålla tummarna” は両親指を残りの４本指で隠す仕草をして「うまくいくことを祈る」を表す．その起源ははっきりしないが，デンマーク語は ”krydse fingre”，ノルウェー語も ”krysse fingrene”，英語は“cross one’s fingers”，ドイツ語はス語の表現形式に近い ”die/den Daumen drücken/halten” があり，さらに簡潔に「幸運を祈る！」と言う場合はス語 ”Lycka till!”, デンマーク語 ”held og lykke!”, ノルウェー語 ”Lykke til!”, 英語 ”Good luck!”, ドイツ語 “Viel Glück!” もあり，未だに同一語源語を使って「運」を願う表現がゲルマン系の言語で広く使われているのは，fara väl で見てきたような「運」的なものが，古くから伝わり，引き続き表現形式を変えて具現化されているとも解釈できよう．

次に，fara の意味を上で「遭遇する，出くわす」などに相当すると説明したが，ス語の定義 fara, färdas, gå から抽出される “移動” の意味が「遭遇する，出くわす」へ移行する過程を別の局面からみてみよう．そこでもう一度古英語の faran の意味に戻ると，ASD(1898)にすべてのゲルマン語に共通して有効と思われる動詞 faran I の定義が次のように記されている．

〈A word expressing every kind of going from one place to another, hence *proceed, travel, march, sail* 〉

つまり，移動手段を問わず「ある場所から別の場所に行くこと」と規定されている．これは，『新明解』の「いく」の定義〈1．その場所から，他の場所へ移動する（進む）〉とほぼ同じである．これに続けてさらに〈2．物事が進行する．(就職がうまくいかない)，3．(物事が) 好 (望) ましい状態に達する．(満足がいく)，4．ある状態になる．(十分とまではいかないが）〉とまで記してある．

一方，森田(1989：119)の「いく㊄到達」では〈事柄がある状態や程度・度合いにまで達するというかなり抽象的な「行く/来る」〉とあり，ここで言う fara の持つ時間的，抽象的な移動・経過までを見越したかのような説明がなされている．

とすれば，日本語の「行く」と fara は意味的に符号する．ただ，fara では事が進行してゆく先々に，前にも述べたが「運・不運」が作用してくることを忘れてはならない．であれば，fara väl は「(よき運が作用して，運に見守られて)順調に行く」（これは Onion(1966)が挙げた〈proceed happily〉に近い）を意味し，それを命令形にして別れの挨拶として去り行く人に告げるということは，「運に見守られて，これから先はつつがなく，首尾よくあなたは歩んでゆかれるように」という重厚で厳粛な挨拶になろう．このニュアンスを引き継いでいるがために，先にも少し触れたが，今でも荘重な感じが漂うのであろう．これが出立する人の運を願って使用されれば，原義に沿った「良き運に見守られて順調にことが運ばれんことを！」であって，決して「よき旅を！」などという平板な気持ちを表出しているのではない．

一方，fara illa はその反対で，「(不運が作用して・運に見放されて)あなたはまずいことに出くわす，大変な目に会う，困った状態に陥る」となる．現代ス語では fara väl も fara illa もともに，3.4.で SAOB が指摘しているように，やや古風で頻度数はさほど高いとは言えないものの，それでも Petti（2000：fara)の中に次のような例文を見出せる．*Han far väl av att* + INF. ”it is (will be) good for him to + INF”, *Han har farit illa i Amerika* ”he has had to rough it (had a hard time [of it])...”. 英語の fare well/ill も文語と見なされ(『ランダムハウス』)，文体的にス語の場合と同じ方向に向かいつつある．両言語とも，もはや堅い文体に限定化されつつある傾向は偶然とは思えないものがある．古くゲルマンの地域で共通して発生し，ともに同じ流れを歩んできているからではないかと思われる．

farväl や farewell の命令形に祈願の意味が含まれていることを論じたが，fara väl/illa は主語の意志で，ある状態・境遇に出くわすのではなく，「くじ，運」的なものを通して，言い換えれば事が主語の意志外で進行し，それが良きにつけ悪しきにつけ主語の身の上に降りかかることを表している．“主語の意志の外” という特性は，ス語では何もこの表現に限定されているわけではない．ljuta もしかり，そして何よりも際立つのは日常的に使われている(助)動詞 få も “主語の意志の外”, “偶発性”,

“移動・到着志考” の要素を有したうえで，[利益/被害]の両面を表現している（清水 2000: 132, 144）．動詞 fara も主語が移動中に出くわす事態に偶発性があり，それが väl/illa で明示される[利益/被害]という二面性を示すということは，få の特徴と軌を一にしている．さらにまた動詞 råka (illa) も fara illa と類似した特性を有している．

5. スウェーデン語 fara/gå：英語 fare/go

[fara+väl/illa]と英語の[fare+well/ill (wrong)]の fara/fare はともに「出くわす」という意味でほぼ一致していると解釈できるが，一方で，主語が人でなくモノもしくは非人称で「事が進む」という用法も fara/fare にある．両言語ともこの意味では，gå/go の使用が増え，現代ス語も英語もこの意味ではもっぱら gå/go が占有しているといっても過言ではない．『ウィズダム』の go の項の例文を示すが，日本語の訳でも（また日常においても）こうした場合，移動を示す動詞「いく」を当然の如く使っているのは偶然の一致とは思えない．

> Everything went wrong [well] for me. 〈私にとって万事うまくいかなかった［いった］〉（ス語では Allting gick dåligt [bra] för mig に相当）

ス語でもこの意味での gå の用法は後期・古ス語から見られるが，主語に人を立てる[fara+väl/illa]と違って，gå の主語はもっぱら非人称や無人称もしくはモノにしか使えない．ただ，fara にもこの非人称文はあるが，後期・古ス語期の fara と gå の併用期を経て，その用法は gå が全面的に引き継ぎ始めていた可能性がある．これに関する考察は本稿の趣旨からやや逸脱するので，別の機会に譲りたい．

6. スウェーデン語 farväl/välfärd：英語 farewell/welfare

farewell の語源が「よき旅を」であるとすれば，この２語の位置をそのまま入れ替えて造った合成語 welfare には当然「よき旅」，あるいは最低でも「旅」の意味の残余が認められるのではないか，ということは 2.1.で多少述べた．確認のため，英語の welfare を古い段階からみていこう．

welfare は古英語の ASD(1898)には記載がなく，MED(1891: wel-fare)では，”sb,=*M.L.G. wolvare*; welfare”とあるのみである［筆者注：MLG=Middle Low German, *wolvare* =welfare］．さらに Barnhart (1988: welfare)によれば，

> ”About 1303, condition of being or doing well, [中略]....; developed from Old English *wel faran* (wel **WELL**[1], adv. + *faran* get along, **FARE**[2]); a parallel formation is found in Middle High German *wolvarn*. The modern sense of social concern or provision for the well-being of children, unemployed workers, etc., is first recorded in 1904, originally in such phrases as *welfare work, welfare committee, welfare policy.*

Barnhart（1988)によると，welfare は古英語の *wel faran* から発達したとしてい

るが，この点に関して特に異論はない．しかし，Barnhart(1988)は初めから *wel faran* を“get along”と規定していることから，「よき旅」などの意味はもとから存在せず，名詞形 welfare の意味に至っては“get along”に沿った”condition of being or doing well”と定めたのは当然であろう．それゆえ，この説明の中には「旅」の意味など微塵も感じられない．むしろ *wel faran* の意味に，Barnhart(1988)は十分とは言えないまでも，これまで論じてきた意味に近い“get along”を充てて簡潔に示したことは評価できよう．

ところで，welfare の日本語訳を『ランダムハウス』は〈(人・集団・組織の)幸福，健康，安寧，繁栄，福利，福祉〉などという多岐にわたる言葉で定義をカバーしようと試みている．言い換えれば，welfare の意味は日本語では一言では表しにくいということであるが，それにしても「旅」らしき意味は出てこず，ス語の välfärd でも「旅」の意味はない．Schlyter (1877)には välfärd の項目はないが，SO (2009)によるとその初出は1450年頃とある．その時代を扱う Söderwall(1884-1918)の意味定義は，

> välfärdh (-ir) *f.* [*isl.* velferđ] *välfärd, välgång, ... framgång*
> 〈(複数語尾-ir)女性名詞［古アイスランド語 velferđ］安寧，幸福,... 成功〉

ちなみに，古アイスランド語 velferð は Heggstad *et al.*(2015)によると”velferd, det at det går ein vel.”〈安寧，その人にとって事が順調に進んでいる状態〉とある．さらに SAOB(1898ff.: välfärd)では，

> om förhållandet l. tillståndet att det går väl l. lyckligt för ngn (jfr.FARA v. [2] 6 a), välgång l. väl l. lycka.〈誰かにとって事がうまくいく，首尾よく進んでいる状況もしくはその状態について，幸福，安寧，幸運〉

その外にも古デンマーク語 vælfart（現代デンマーク語 velfærd)，古・現代アイスランド語 velferð（ノルウェー語 velferd)，中世低地ドイツ語 wolvart，中世オランダ語 welvaert（現代オランダ語 welvaart)，ドイツ語 Wohlfahrt，英語 welfare など他のゲルマン語の同語源合成語を挙げている．このリストからもわかるように，英語の後要素 -fare 以外は，他のゲルマン諸語の後要素はすべて動詞 fara からゲルマン祖語共通の接尾辞 *-ði (Wessén 1971: 55-56)を通して派生した名詞である．英語の welfare のみ後要素に，動詞 fare をそのまま名詞化して合成語を造語している点は際立って特異である．

これら列記された語の意味も上の welfare の意味とほぼ同じである．ちなみに Barnhart (1988)が指摘しているように英語の welfare が「社会福祉，生活保護，厚生，福祉（国家)」の意味を持つようになったのは今からわずか 120 年ほど前の 1904 年としており，ス語は 1902 年となっている（SAOB)．社会が福祉面に注意を注ぎ始めた年代がこれで知れよう．

上記のような welfare/välfärd が「幸福，安寧，幸運」の意味となるのは，元と

なる[fare well/fara väl]に「幸運に遭遇する，事がうまくゆく」の意味が原義にないと説明ができない．事実英語の welfare の初出は 1303 年頃(『新英和大』)，ス語の välfärd は 1450 年(SO)とあり，英語に関していえば基となる英語の動詞句 fare well の初出からおよそ 300 年後の出現である．ス語の välfärd も動詞句より後発であることは間違いない．このことから動詞句の「運に遭遇する，事がうまくゆく」の意味から，まさにその結果を表す派生名詞の「幸福，安寧」の出現へとつながってゆくのであって，ここに初めから何の根拠もない「よき旅を！」などという意味が入り込む余地はない．

本来[wel(l)-/ill-]や[väl-/ill-]を前要素として造られる合成語は，後要素に通例過去分詞(現在分詞の例は少ない)を要求する(welcome/välkommen, well-dressed/välklädd など)．後要素に名詞を伴う例はかなり例外的である．この一般的な造語法に従わぬまま，同一語源の合成名詞 welfare/välfärd がゲルマン語全般に共通して認められるのは，何を意味しているのだろうか．おそらくすべてのゲルマン語で［fare 命令形＋well 副詞］相当の動詞句が本来の命令・希求から離脱して，定型句的な別れの挨拶言葉，すなわち間投詞として固定化し，一方でその名詞形が求められた結果，生じたのが[wel(l)/väl+名詞]の合成語であったと想定できる．そうであれば，まず動詞句，しばらく時間をおいて挨拶言葉（間投詞・名詞），そして合成名詞へと続く出現順序は初出の年代順にしたがっている．ただ，英語とス語間で挨拶言葉や合成名詞の出現年代に多少の差がみられることは今後の課題として残る．

ちなみに，英語 farewell，ス語 farväl に相当するドイツ語に，Fahr(e) wohl と同義語とされる表現 Leb(e)wohl〈(別れのあいさつとして)達者でね，さようなら〉（国松 : 2000）がある．デンマーク語の farvel も，このドイツ語と同語源で同じ意味を有する levvel に置き換えられると説明され(DDO: 2003-2005)，ノルウェー語もス語も同様に lev vel/lev väl がある．ドイツ語の副詞 wohl と vel/väl は同語源で意味も共通しており，Leb(e) (<不定詞 leben＝英 live)も lev (<不定詞（デンマーク語・ノルウェー語) leve/ (ス語) leva＝英語 live)もともに命令形であることから，「どうぞお元気にお過ごしください，お健やかに暮らしてください，お達者で」ということになるであろう．問題は，fara と違って leva には運の関与を登場させる意味の下地がないことである．それゆえ，lev väl には，farewell/farväl に込められたような運への関与は特に認められない（なお，lev väl と farväl の使用環境の違いについては，本章の末尾参照)．

一方，gå väl から派生した名詞 välgång（ここも väl-の後要素が名詞！）の意味は välfärd とほぼ同じとみなされているが，SAOB を見ると初出は遅く 1605 年，そして välfärd には見られない意味が一つある．それは gå väl〈うまくいく〉が成就した結果を表す〈成功〉(= framgång という句で規定されている）という意味である．

この意味があるため，たとえば välgångsskål「成功の祝杯」という表現は自然に聞こえても，*välfärdsskål は言えないことから，両者は必ずしも同一の意味とは言えない．このことから fara väl と gå väl は必ずしも同じ意味ではないということが映し出されてくる．fara väl と gå väl/bra の違いは，主語の立て方に違いがあるばかりでなく，「運の存在」の有無が関係していることも垣間見えるが，両者のさらなる違いもまた別の機会に考察したい．

最後に，farewell に「よき旅を」という語源を主張するのであれば，同時に存在していた表現 fare ill の意味は一体どう捉えるつもりなのであろうか．「悪しき旅をする」であろうか．またこれまで検討してきたように，合成名詞 welfare には「よき旅」という痕跡はない．これらの点を踏まえると，farewell の語源に「よき旅を」を主張するには無理がある．以上のような疑問点が残る限り，「よき旅を」の語源説を受け入れることはできない．

ス語の挨拶表現 farväl は，すでに 19 世紀半ばに出版された Dalin(1850-55)の辞書で，以下のように説明されている．

> **FARVÄL!** int. Innefattar tillönskningar om lycka och välgång, då man tar afsked af någon. Är egentligen imperativ: ***Far väl!*** svarar emot det franska Adieu.
> 〈**FARVÄL!** 間投詞．別れを告げる際に幸運と幸福についての願いを含む．本来は命令形．***Far väl!*** はフランス語の Adieu に相当する.〉

Dalin は FARVÄL にフランス語の別れの挨拶である Adieu を充てて，「よき旅を！」を意味する Bon voyage! などには一言も言及していない．このことからもわかるように，「よき旅を！」などという語源説はますます遠のいてゆく．

ところで，借用元のフランス語 adieu の語源を『ロベール仏和』(1988) は〈(je vous recommande) à Dieu 神のお恵みがありますように〉としている．直訳すれば「私はあなたを神に推挙します」，つまり「神があなたを良きに計らいますように」ということとなる．先に[fara+väl/illa]の原義に触れた際，古北欧では事が順調に行くかどうかは「運」が左右する世界観であると述べた．この「運」が早期に改宗が進んだキリスト教の世界ではキリスト教の「神」がその役目を果たしていたということになろう．キリスト教に早くから接触してきた南欧に位置するロマンス語圏では別れの挨拶に「神」がしばしば登場するが，タキトゥスが描写する，そこから遠く離れたゲルマンの世界では，キリスト教に接触する以前から[fare+well]相当句が存在し，「運」が重要な役割を果たしていた世界での別れの挨拶に，この句の命令形を利用して幸運を祈る表現が広く定着していたとみることができる．ゲルマン諸語にこれほど語源的に同一で，共通の別れの挨拶が存在していることはその証左となろう．そのようなゲルマンの世界では，改宗後もキリスト教の神を表す語がこうした定型挨拶表現の中には容易に入り込める余地はなかったのではないかと思わ

れる（ただ，farewell 表現そのものに直接手が加えられることはなかったが，その後，ゲルマンの世界では強い感情を吐露する状況では「神」関係の語彙を組み込んだ表現や間投詞は多々登場する.）．こうして動詞句[fare+well/fara+väl]表現の中にみられた「運」を[farewell/farväl]が引き継いで，特有な別れの挨拶表現として確立されていったものと思われる．しかし，その後キリスト教の浸透にともない，ゲルマンの世界でも「行く末」を決めるのは「運」から「神」が主役になり，別れの挨拶となっていった例を英語，ス語からそれぞれ挙げておく．Good-bye (= God be with ye［初出 1573-80 年『新英和大』］〈(別れたあとも)神があなたのそばにおられますように！〉)，God bless you!〈あなたに神のお恵みがあらんことを！〉，ス語からは相当堅い文体になるが Herren bevare dig från ondo!〈神様が悪からあなたをお守りくださるように！〉などがある．これらの表現は「運の到来」を願うのではなく，「神のご加護を！」という発想に切り替わっていることを示している．言い換えるならば，キリスト教の浸透を間接的に表示しているともいえよう．

ところで，farväl と adjö の使用環境について，次のような指摘がある(Bergman 2007: adjö)．

〈adjö はもともと出立する人が残された人へ発する言葉．farväl は出立する人に向けられる言葉〉

先に挙げた lev väl も Wessén(1973: levväl)によると[2]，残された人に対して使われると述べていることから，adjö とまったく同じ使用環境である．スウェーデン人は今でもこのような言語感覚を持っている（英語の farewell/adios もおそらくス語と同じ使用環境と思われる)．運が直接関与しない lev väl や外来語を用いる挨拶言葉 adjö などと比べると，運が関与する farväl の言葉のほうがなぜ出立する人に向けられるのかは容易に想像がつくであろう．たとえば数百年前の旅事情に思いを馳せば，まったく未知の世界へ旅立つ家族や友人に手向ける言葉は，現在でも多分そうであろうが，いかなる困難に遭遇するかと思うと，神仏にもすがるように祈願される「運への祈願」しか思いつかないであろう．ましてや二度と会えない恐れのある，別れの場面が想定される中で，「よき旅を！」では願いの有効期間も旅行中限定となり，こうした深刻な別れの状況においてはあまりにも楽観的で中身も貧弱となり，おざなりの挨拶にしか聞こえない．このような状況から考えても，farewell/farväl に「よき旅を！」などとする語源説には到底与することはできない．去り行く人にこれから先の長い

[2] Wessén(1973)によると，farväl は ”nord. o.germ. välönskan (eng. *farewell*) ’må din resa gå väl’” 〈ノルド語及びゲルマン語の良運への祈願（英 *farewell*）) ’あなたの旅がうまくいくことを’〉とある．Wessén のこの「よき旅を」の語源説は上述してきたように説得力に欠ける．Wessén の後継的語源辞書ともいえる Ernby (2008: farväl)では，この説は削除され，代わりに『新英和大』の語源説明とほぼ同じような曖昧な記述に変更されている．その是非は別として，これにより少なくとも Wessén 説は明らかに却下されたと確認できる．

人生に向けても合わせて願う「運があなたを（ずっと）見守りますように！」とする別れの言葉のほうが，はるかに重みがあり，状況的にもふさわしく，さらに，ここで考察してきた語源の解釈も全面的にその方向を支持している．

7．おわりに

英語のみに専念していると，慣れ親しんでしまっている英語の特異な文法現象にはなかなか気付が付かない．外国語，特に英語と極めて近い関係にあるノルド語の視点に立つと，ノルド語と微妙に異なる英語の，ややもすれば不可解な文法現象によく出くわす．そのような現象をノルド語のフィルターを通して眺めると，その疑問点を解く糸口があちこちに散らばっている．その鍵やヒントを一つ一つ拾って考察してゆくと，英語とはどんな言語なのかを再発見し，また翻ってノルド語の有用性と深淵さを改めて知るきっかけにもなるであろう．

本稿はノルド語の一つであるス語から英語表現の疑問点を追求してみたが，ノルド語はその疑問解決の鍵が多数埋蔵されている宝庫と言っても過言ではない．

[2021. 09.19.]

Om etymologin av det engelska avskedsuttrycket *farewell* ur svenska språkets synpunkt

Ikuo Shimizu

Sammanfattning

En del engelsk-japanska ordböcker förklarar att den ursprungliga betydelsen av *farewell* är ”Have a nice journey!”. Avskedsuttryck som etymologiskt motsvarar *farewell* finns i de flesta germanska språken, t ex sv. *farväl,* ty. *Fahr wohl* o.s.v. och har haft gemensam betydelse i alla germanska språk. Denna fras anses därför vara mycket ålderdomlig. Detta avskedsuttryck kommer ursprungligen från verbfraserna *fare well/ill*, *fara väl/illa,* vars definition enligt Söderwall är ”att få ett visst **öde**”. Eftersom avskedsuttrycken har att göra med ”öde” och innehåller imperativ av *fara*, innebär dessa avskedsuttryck ”Du må ha ett gott öde med dig för att klara av olika situationer!” dvs. ”Må du ha lycka med dig!”. Detta uttryck borde snarare tolkas som att det är ”tur/otur” som har stor betydelse för att bestämma ens

öde eller framtid. Man kan inte försöka kontrollera ”fara väl/illa” av sin egen vilja, utan man får bara ta emot ett bra/dåligt öde. Detta tänkesätt ansågs vara allmänt utbrett i den germanska världen såsom Tacitus påpekar i *Germania* (kap. 10). Vi har även ett sammansatt substantiv som bildades till *fare well*, *fara väl,* nämligen *welfare, välfärd* och det betyder ”good wishes”, ”lycka, välgång”, inte ”a nice journey” fast det består av samma ord.

Eftersom det inte finns något belägg för att *farväl* betyder ”Ha en trevlig resa” i fornsvenskan, påstår därför författaren att etymologin av engelska *farewell* ”Have a nice journey” är felaktig. Den riktiga betydelsen av avskedsuttrycket är ”Må du som reser bort ha ”tur” med dig för att klara av olika situationer och därmed få välgång och lycka!”.

参 考 文 献

ASD (= Bosworth, Joseph & Toller, T. Northcote. (ed.). 1898. (reprint 1964): *An Anglo-Saxon Dictionary.* Oxford: Oxford University Press.)

Barnhart, Robert K. (editor). 1988. *The Barnhart Dictionary of Etymology.* New York: The H. W. Wilson Company.

Bergman, Bo. 2007. *Ordens ursprung. Etymologisk ordbok över 2 200 ord och uttryck.* Stockholm: Wahlström & Widstrand.

Cleasby, Richard & Vigfusson, Gudbrand.1957. (reprint 1962. second edition). *An Icelandic-English Dictionary.* Oxford: Oxford University Press.

Dalin, Anders Fredrik. 1850-1855 (reprint 1964). *Ordbok öfver svenska språket*. Stockholm: Svenska bokförlgat/Norstedts.

DDO (= Det Danske Sprog- og Litteraturselskab. 2003-2005. *Den Danske Ordbog.* Bind 1-Bind 6. København: Gyldendal.)

Ernby, Birgitta 2008. *Norstedts etymologiska ordbok.* Stockholm: Norstedts Akademiska Förlag.

『ジーニアス大』.（＝小西友七・南出康世（編集主幹）. 2001.『ジーニアス英和大辞典』. 東京：大修館書店.）

ハストロプ，K. 編.（熊野聰・清水育男・早野勝巳訳）. 1996.『北欧社会の基層と構造２．北欧の自然と生業』. 東京：東海大学出版会.（= Hastrop, Kirsten (ed.). 1992. *Den nordiske verden I—II*. Copenhagen: Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag A.S.）

Heggstad, Leiv *et al*. 2015. *Norrøn ordbok*. Oslo: Det norske samlaget.

Hellquist, Elof. 1948 (1966). *Svensk etymologisk ordbok*. (tredje upplagan). Lund: C. W. K. Gleerups förlag.
小島義郎 他（編）．2004.『英語語義語源辞典』．東京：三省堂.
国松孝二 他（編集）．2000.『小学館 独和大辞典』．東京：小学館.
『ルミナス』（＝竹林滋・小島義郎・東信行・赤須薫（編）．2005.『ルミナス英和辞典』（第２版）．東京：研究社.）
政村秀實．2002.『英語語義イメージ辞典』．東京：大修館書店.
MED (= Stratmann, Francis Henry & Bradley, Henry. (ed.). 1891. (reprint 1974): *A Middle-English Dictionary.* Oxford: Oxford University Press.)
森田良行．1989.『基礎日本語辞典』．東京：角川書店.
『日本国語大辞典』（＝小学館国語辞典編集部．2006.『小学館 精選版 日本国語大辞典』．東京：小学館.）
OED（＝*The Oxford English Dictionary.* 1989 (second edition). Oxford: Oxford University Press.）
Onions, C. T. (ed.). 1966. *The Oxford Dictionary of English Etymology*. Oxford: Oxford University Press.
Partridge, Eric. 1966 (Fourth Edition). *Origins. A Short Etymological Dictionary of Modern English*. London: Routledge & Kegan Paul.
Petti, Vincent (red.). 2000. *Norstedts stora engelsk-svenska ordbok*. Stockholm: Norstedt Ordbok.
『ランダムハウス』（＝小西友七・安井稔・國廣哲彌・堀内克明（編集主幹）．1994.『小学館 ランダムハウス英和大辞典』．東京：小学館.）
『ロベール仏和』（＝小学館ロベール仏和大辞典編集委員会（編集）．1988.『小学館 ロベール仏和大辞典』．東京：小学館.）
SAOB (= Svenska Akademien. (utg.). 1898ff. *Svenska Akademiens ordbok*. Lund: Svenska Akademiens ordboksredaktion.)
Schlyter, Carl Johan (utg.). 1877. *Ordbok till Samlingen av Sweriges Gamla Lagar.* Lund: C. W. K. Gleerups.
清水育男．1998.「スウェーデン語史への文献案内」*IDUN* vol. 13, 89-111.
――．2000.「スウェーデン語の助動詞 få の成立について―義務的用法を中心に―」*IDUN* vol. 14, 123-149.
『新英和大』（＝竹林滋（編）．2002.『新英和大辞典』（第６版）．東京：研究社.）
『新明解』（＝山田孝雄・柴田武・酒井憲二（編集）．2011.『新明解国語辞典』（第七版）．東京：三省堂.）
Skeat, Walter W. 1911 (1972). *A Concise Etymological Dictionary of the English*

Language. Oxford: Oxford University Press.
SO (= Svenska Akademien. (utg.). 2009. *Svensk ordbok*. Stockholm: Norstedts.)
Söderwall, Knut Fredrik. 1884-1918. *Ordbok öfver svenska medeltids-språket*. Lund: Samlingar utgivna av Svenska fornskrift-sällskapet.
タキトゥス, コルネーリウス (泉井久之助訳) 1979.『ゲルマーニア』(改訳版). 東京：岩波書店.（= Tacitus, Cornelius. *Germania*）.
寺沢芳雄（編集主幹）. 1997.『英語語源辞典』. 東京：研究社.
『ウィズダム』（＝井本永幸・赤野一郎（編）. 2013.『ウィズダム英和辞典』（第３版）. 東京：三省堂.）
Wessén, Elias. 1971. *Svensk språkhistoria II. Ordbildningslära.* Stockholm: Almqvist & Wiksell.
——. 1973. *Våra ord, deras uttal och ursprung*. Stockholm: Läromedelsförlagen Språkförlaget.